

ふたつのテミストクレス伝

— プルタルコスとネポスの比較研究 —

内 林 謙 介

1. はじめに

テミストクレスは、古代ギリシア史上でも有名な部類に入る人物だが、この人ほど伝記を書くのが難しい人も珍しい。ざっと2500年も前の人なのだから、史料が少なくて困るというわけではなく、むしろ史料はよく残っている方である。けれども、それらがいちいち様々な情報を提供して、容易にひとつの像を結んでくれないのである。

たとえば、その母親について。ある人はハプロトノンというトラキア人だったというし、またある人はエウテルペというカリア人だったという¹。かと思えば、アカルナニア市民の女性だと断言する人もいるし²、遊女だったと言い出す人までいる³。こうさまざまに矛盾する史料があると、どうやらテミストクレスの母親は外国人だったらしい、ということが言えるだけになってしまう。

出生の反対の死亡についても、さまざまな説が残っている。死んだ場所がペルシアだ、という点では一致してるのだが、死んだ理由となると、病死説と自殺説とがあって、さらに自殺説が毒物による自殺と、牡牛の血を飲んで自殺したという現代人から見るとまことに奇怪な説に分かれている⁴。だから、結局、確実に言えるのは、どうやらペルシアで死んだらしい、ということだけである。

テミストクレスに関する伝承は、じつは一事が万事、こんな調子なので、伝記を書くとなると非常に苦勞する。Podlecki⁵などは、もはやオーソドックスな伝記の形態は放棄してしまって、最初に簡単にテミストクレスの伝記を書いたあと、テーマごとにどのような伝承があるかを比較検討する、という変則的な形にしている。普通の伝記の形式を守ったLenardon⁶も、異なる伝承のなかから何とか妥当な解釈を引き出そうと苦闘している。近年に日本で発表されたテミストクレス

伝も⁷、かなり頁が事実の考証のために割かれていて、正直なところすっきりと読みにくくなっている。

さまざまな伝承が入り混じっている、というのは古代でも同じであったようで、現存する古代のネ波斯とプルタルコスのみふたつのテミストクレス伝の両方で、テミストクレスについては様々な伝承がある、と断ってある箇所がある⁸。

けれども、様々な伝承があって決まりきった伝記が書きにくいということは、裏を返せば、伝記を書くにはなんとなく既存の史料を写せばすむということではなくて、なんらかの方針をもって史料を取捨選択しながら書かなくてはいけない、ということでもあり、それだけ、著者の個性が見えやすい伝記にもなる、と言えそうである。

そこで、本稿ではこのむずかしい人を扱った古代のみふたつの伝記、ネ波斯の『テミストクレス伝』とプルタルコスの『テミストクレス伝』を比較してみることによって、古代の伝記作家の手法の特徴を浮かびあがらせることを試みてみたい。

2. テミストクレスの生涯

具体的にネ波斯とプルタルコスを比較にはいる前に、确实であって、かつ、重要であると思われる事柄を中心に、テミストクレスの生涯を簡単に振り返っておきたい⁹。

テミストクレスは、前6世紀後半にアテナイに生まれ、前490年代には政治家として活躍を始めていたらしい。わかっている最初に手がけた重大な政治活動は大規模な海軍の増強である。前483/2年にアッティカで新しい銀の鉱脈が見つかった時、これを海軍の増強の費用に当てることを提案し、実現した。この結果、100隻とも200隻とも言われる三段櫓船が新造されたという。

その後、第3回ペルシア戦争が勃発し、クセルクセスが大軍を率いてギリシアに侵攻してくると、テミストクレスはアテナイ軍を指揮して、サラミスの海戦などでペルシア軍を打ち破ることに貢献した。サラミス海戦で、先の海軍の増強が役に立ったことはいうまでもない。

ペルシア戦争後も、スパルタの妨害を阻止して破壊されたアテナイの城壁の再建を進めるなど、指導的な政治家であったが、前472年頃にどういふわけか陶片追放に処されて、アルゴスに亡命し、その後ペルシアとの内通を疑われて各地を転々としたあと、最終的にはペルシア大王の下に亡命、そのままペルシアで生涯を終えたといわれる。65年の生涯であったという。以上が、簡単なテミストクレスの生涯のあらましである。

3. ネポスの『テミストクレス伝』

年代的に先行するネポスの『テミストクレス伝』の特徴から先に見て行きたい¹⁰。

ネポスの『テミストクレス伝』には、伝記の最初に方に全体を貫くキーワードが提示されている。つまり、ネロスによると、

テミストクレスは必要なことをすばやく見抜き、それを弁舌 (oratione) で容易に説明し、策を考え出すのに劣らず、実行に移すのもすばやかだった (II. 1)

というのである。これはどうやら、トゥキュディデスのテミストクレス理解を土台にしているようであるが¹¹、ポイントとしては、①先見の明があること、②言葉 (言語能力) に秀でていること、③頭で考えるだけでなく実行力のあること、の3点が挙げられている。そして、ネポスの『テミストクレス伝』で紹介されているテミストクレスの事績をみると、ほとんど全部がこの3点によって説明をすることが出来るのである。

まず、テミストクレスは、政治家としての活動をはじめると、さかんに民事訴訟をてがけ、積極的に民会に足を運ぶことによって、政治的な評判を高めたとされる (II. 1)。

テミストクレスは決して家柄が抜群にいいというわけではなかったから、裁判や民会などに関わって政治家としてのキャリアを積んでいったことは事実であっ

た可能性が高い。民事訴訟でも民会でも、ものをいうのは言葉の力である。

つづいて、コルクキュラ（ネボスはアイギナと間違えているらしい）との戦争にそなえて、銀山からあがる収益で100隻の艦隊を備えるようにと民衆を説得し（*persuait*）、この艦隊は直ちに建造されて、アテナイは海上の安全を確保した。そして、この時建造された海軍はペルシア戦争で、全ギリシアに勝利をもたらすことになった（II. 2）。海軍の重要性を見抜き、言葉の力を発揮して、見事に実現にこぎつけたテミストクレスの能力の面目躍如たる事例である。

そして、クセルクセスが侵攻してきて、アテナイがデルポイに神託を求めたところ、「木の壁で自らを守れ」、という返事であった。アテナイ人は誰もこの神託の意味がわからなかったが、テミストクレスが「木の壁」とは、船のことだと説いて（*persuait*）、それが採用された（II. 2）。神託を解釈するのものの言語能力の発揮の一種であろう。

さらに、サラミス島付近でギリシア、ペルシアの両艦隊が対峙した時、ペルシア軍を恐れた他のギリシア人たちがそれぞれの故郷に退却して籠城しようと言い出したとき、テミストクレスは反対して、ギリシアは結束すれば勝てるが、ばらばらになってしまえば滅びてしまうと言った（*aiebat*）。けれども、この時はテミストクレスの言語能力はギリシア軍の最高指揮官エウリュピアデスを動かすには至らなかった。そこで、テミストクレスは言語能力をペルシア大王に向けて使うことにする。すなわち、自分の奴隷を使って、クセルクセスに、いま決戦をすれば、一挙にギリシア軍を壊滅することが出来るとそそのかして、ペルシアの側から攻撃を仕掛けるようにさせたのである。今度はテミストクレスの説得は成功、ペルシア軍は不利な状況で戦端を開いてサラミスの海戦に大敗し、戦争自体も敗北に終わることになったのである。ネボスは次のように総括している。

クセルクセスはギリシア人の武力というよりは、テミストクレスの策略（*consilio*）に破れたのである（II. 4）

ペルシア戦争後、テミストクレスはアテナイの再建に尽力する。が、なかでも難問だったのが、市の城壁の再建であった。スパルタが、ペルシア軍の拠点にな

る恐れがあるとして、ペロポネソス半島の外の城壁の建設に反対したのである。ネ波斯によれば、これは口実で、スパルタはすでにアテナイを将来の競争相手とみなして、その弱体化を図ったのであるという。

城壁の再建をはじめたことをスパルタ人に知られると、テミストクレスは自ら使者となってスパルタに乗り込み、城壁再建の有無の検分のためと称してスパルタにも家柄の良い者をアテナイに使節として送らせた。そうしておいて、テミストクレスは、スパルタ政府のもとに乗り込んだ。そして、アテナイはペルシアからギリシアを守る防壁であって、城壁を建設することは全ギリシアの利益にかなうことである、スパルタ人の行動は自分の支配権のことばかりを考えた不正なものだ、と主張した後、自分を無事に帰さない、アテナイに送ったスパルタ人の使節も返さない、と脅かして、ついに城壁の再建をスパルタ人に黙認させることに成功した（Ⅱ． 7）。言語能力と実行力の見事な発揮である。

けれどもその後、運命は暗転し、テミストクレスは民衆の嫉妬を受けて陶片追放にあい、アルゴスへと亡命することを余儀なくされる。さらに、スパルタからテミストクレスはペルシアとの内通の疑いありとの情報をもたらされ、テミストクレスは欠席裁判で反逆罪の宣告を受けてしまう（Ⅱ． 8）。こうなるとは、アルゴスにいることもできなくなり、テミストクレスはエペイロスのアドメトス王のところやピュドナなどを転々とした挙句、思い切って仇敵ペルシアのところへ亡命することにする。この一見、無謀ともみえる亡命を成功させたのもテミストクレスの言語能力であった。すなわち、テミストクレスはペルシア大王に見事な手紙を書いて、これを読んだ大王が

テミストクレスの精神の高邁さに感服して、このような人物と親交を結びたいと望んで、亡命の願いを受け入れた（Ⅱ． 10）

というのである。その後、テミストクレスはペルシアで死に、ネ波斯の『テミストクレス伝』は幕を閉じる。全編にわたって、最初の分析が適応されていることは明らかである。

4. プルタルコス『テミストクレス伝』

つづいて、プルタルコスの『テミストクレス伝』を見ていきたい。が、すでに生涯の簡単な紹介とネポスの伝記の特徴を述べながら、テミストクレスについての時系列的な説明はほぼしてしまったので、プルタルコスの『テミストクレス伝』については、ネポスとの比較において特徴的なことをピックアップして述べていきたい¹²。

プルタルコスの『テミストクレス伝』において特徴的なことは、まず、テミストクレスの内面に関する深い関心があることである。つまり、長い間アテナイの政治的指導者であり、あれほどの大事業を成し遂げて、波乱万丈の生涯を送ったテミストクレスの原動力はなんであったかを、プルタルコスは追及するのである。そして、プルタルコスが見出したもののひとつは、テミストクレスの飽くなき名誉欲 (philotimia) であった。

たとえば、プルタルコスはマラトンの戦いの後、他の人間が大きな名誉を得たのを目の当たりにしたテミストクレスの姿を次のように描いている。

テミストクレスはあまりに名声に狂い、名誉欲に駆り立てられて大業の虜になっていたので、まだ若者だったころに蛮族（ペルシア人）との間にマラトンの戦いが起って、ミルティアデスの指揮ぶりが宣伝されると、すっかりひとりで考え込んで夜も寝られず、いつも加わっていた宴会も断るような有様で、その生活の変りように驚いた人が理由をたずねると、「ミルティアデスの勝利が眠らせてくれないのだ」と言ったということである（第三章）

この他にも、プルタルコスは子供の頃をふくめて何度かテミストクレスが名誉欲にとらわれていたことに言及しており（第2章、第5章）、名誉欲がテミストクレスを突き動かした内面的な動機のひとつであったと考えていたことは確実である。

では、名誉欲だけが、テミストクレスを危険な戦争をも辞さない人物にしたのかというと、そうではない。プルタルコスはもうひとつのテミストクレスの重要

な内面を提示する。それは、テミストクレスは愛国者であって、故郷のアテナイとギリシアを愛しており、ギリシアが一丸となってペルシアと戦えるようにと尽力する人物である、ということである。

たとえば、ペルシア大王の使節が通訳を通して無条件降伏を求めてくると、テミストクレスは、

通訳を捕まえて、蛮族の命令を伝えるのに敢えてギリシアの言葉を用いたとして、決議によって処刑した（第6章）

という。

また、対ペルシアのギリシア連合艦隊が結成された時も、その総指揮官にアテナイ人になるかスパルタ人になるかが問題になり、他のギリシア人たちがスパルタを推して、アテナイ人がこれに不満をもってギリシアの内部が不穏になった時、

テミストクレスは危険を見て取ると、指揮権を自らエウリュビアデス（スパルタ人）に譲り、アテナイ人をなだめて（第7章）

危機を回避したという。プルタルコスは、

テミストクレスの最大の業績はギリシア人同士の争いを解消して各ポリスを和解させ、ペルシアとの戦争に備えてギリシア人たちに互いの敵意を棚上げにするように説得したことであった（第6章）

とまで言っている。

晩年になってからも、テミストクレスはスパルタの将軍パウサニ阿斯からペルシアとの内通を持ちかけられるがきっぱりとこれを断っていることになっている（第23章）、ペルシアに亡命した時も、テミストクレスがペルシア大王に自分がいればギリシアを征服できると言った、という他の史料に見られることは記されていない（第28章）（これが、ネ波斯だと自分の策を用いれば武力でギリシア

を征服できると言ったことになっているし（Ⅱ、10）、トゥキュディデスにも自分をつかえばギリシアを征服できるといったことが間接的に書かれている（1、138）。

そして、いざペルシア大王がギリシアとの戦争にテミストクレスの参加を求めてくると、自ら命を断って、生涯を終わらせてしまったことになっている（第31章）。プルタルコスによれば、「なによりも自分の功績に対する名声と数々の勝利の記念碑への恥（第31章）」から自殺したのだという。テミストクレスは故郷で築き上げた名声を損なうことを、死ぬことよりも恐れていたということになる。

このように、プルタルコスは名誉欲と愛国心のふたつをテミストクレスを突き動かした内面的なエネルギー源とみており、伝記全編にわたってしばしばそのことに言及している。これがネ波斯になると、テミストクレスの内面的な動機といえば、若いころに不良をはたらいたうえに財産を食いつぶして父親に勘当され、逆にこれに発奮して政治の世界にはいったということが最初の方に述べられているだけで（Ⅱ、1）、あとは内面的な説明はないままに伝記が進むのである（ちなみに、父親に勘当されて発奮したという話は有名な話だったようで、プルタルコスもそのことに触れている。が、こんなものは作り話に過ぎないと一蹴している（第1章））。

さらに、プルタルコスが記述していて、ネ波斯が書いていないことにテミストクレスと金銭の関係がある。テミストクレスは日本の政治用語でいうところの“表芸”だけで政治をしない人であつたらしく、かなり強引に金銭を集めて、裏金として用いていたらしい。これが、家柄の良くなかったテミストクレスがアテナイの政界に影響力を行使できた大きな理由のひとつでもあつたようだ。すでにヘロドトスがテミストクレスが金銭に汚かった点を厳しく糾弾している（例えば『歴史』第8巻 第4章～5章）。晩年、テミストクレスがペルシアに亡命して、アテナイに残っていた財産が国庫に没収された時、すでにかかなりの量が運び出されていたにもかかわらず、80タラントンとも100タラントンともいわれる財産が残っていたという¹³。政治を始める前にテミストクレスが持っていた財産はわずか3タラントンだった。（ちなみに、ペルシア戦争に先立ってアテナイは富裕者に1タラントンずつ配って、これで各自三段櫓船を一隻建造するように命じたと、

アリストテレスは伝える¹⁴⁾。

ネ波斯は、テミストクレスと金銭の関係についてはなにも述べておらず、その政治的な活躍ももっぱら言語能力に秀でていることに帰している。提示した主題を守るために、思い切った省略を行なっているといっていであらう。一方、プルタルコスがテミストクレスが利殖家であったことは認めたくて（第5章）、さまざまなエピソードを紹介して、たんに強欲に金銭を集めていたのではないことを示そうとしている。

たとえば、ペルシア戦争が始まって誰を将軍にするかが問題になった時、エピキュデスという雄弁ではあっても臆病者の扇動政治家が将軍なりかけた。そこで、テミストクレスは金を使って買収して、これを阻止したという（第6章）。プルタルコスは「テミストクレスは名誉欲を金でエピキュデスから買った」という表現をしている。

また、アルキテレスというテミストクレスと非常に敵対していた人物がいたが、この人がペルシア戦争に三段橈船一隻の費用を請け負って出征したが、船員に支給する金銭がなくなってしまった。テミストクレスは船員をけしかけてアルキテレスを襲わせて、その食事を奪わせた上で、食糧を入れた箱をアルキテレスに送り、箱の底には1タラントンを入れ、この金で船員の面倒をみよ、さもないとこの金をお前がペルシアから貰ったと罵ってやるぞ、と言ったという（第7章）。すこしややこしい話だが、要はテミストクレスがペルシア戦争を前に旧怨を忘れて、アルキテレスを救った、ということであろう。

このように、プルタルコスはテミストクレスが集めた金銭を国家やギリシアのために使っていることを示し、テミストクレスの利殖には政治的、愛国的な動機もあったのだということを言いたいようである。よく知られた事実であれば自分の作品の方針にそわないものでも取り入れ、なんとか自分の理解の範疇に入れようとする努力をしていることがわかる。

さらに、プルタルコスが取り上げて、ネ波斯が関心を示さないもうひとつの大きなテーマに、テミストクレスと超自然的なものとの関係、特に神々との関係がある。

ペルシア戦争に先立ってアテナイがデルポイに神託を求めたところ、「木の壁

で自らを守れ」という神託が下り、テミストクレスが「木の壁」を船のことだと解釈したという有名な話がある（ヘロドトス『歴史』第7巻140章～143章）。この話については、ネボスもプルタルコスも記しているが（ネボス『テミストクレス伝』Ⅱ. 2、プルタルコス『テミストクレス伝』第10章）、ネボスの場合は神々とテミストクレスの人生が関わってくる話はこの有名な一事だけで、あとはなんのエピソードも紹介されない。自らの方針と合わなかったせい、そもそもネボスがあまり神々と人間の関係について関心がなかったせい¹⁵、ともかく、ネボスの『テミストクレス伝』はテミストクレスと神々の関係は最小限のことしか伝えてくれないのである。

これに対して、プルタルコスはテミストクレスと超自然現象や神々との関わりについてきわめて豊富な情報を提供してくれる。

まず、有名な「木の壁」の神託の解釈については、ヘロドトスやネボスとちがって、アテナイにペルシア軍が迫ったとき、テミストクレスがアテナイを放棄することを市民に納得させるために持ち出されたものである、としている。

つまり、市民たちが故郷を一時的に放棄することに納得せず、

このような状況では、テミストクレスも人間の理屈ではいかにしても大衆を引っ張ることができなかつたので、悲劇の中で機械仕掛けの神が持ち出される要領で、神々の前兆と神託を持ち出した（第10章）

というのである。つまり、プルタルコスに寄れば、「木の壁」を船のことだと解釈したのはアテナイ人が船に乗って一時避難することを納得させるための方便だったというのである。同時に、神様に捧げられる初穂がそのままだったので、神はアテナイをすでに後にしている、といて市民を説得した話もプルタルコスは伝える。

その後、サラミス沖において決戦するか否かがギリシア軍内で議論になった時、主戦論を唱えるテミストクレスが話を終えると、フクロウが一羽飛んできて船の帆柱の上に羽を休めたので、一時、ギリシア軍はテミストクレスの意見に傾いたという（第11章）。フクロウはアテナ女神の使いだから、テミストクレスに女神

が味方していると解釈されたのであろう。また、サラミス海戦に先立って、テミストクレスのもとに3人ペルシア人が連れてこられて、占師のエウフランティデスがこの3人をディオニュソス神への生贄に捧げるように、そうすればギリシアは救われる、と言ったという。テミストクレスはこの申し出に恐れおののきなから、結局は占師の言うとおりに3人の人間を生贄にしたという（第13章）。

また、テミストクレスがアテナイを追われて、キュメの有力者の下に身を寄せていた時、その家の家庭教師が神がかりになって神託を告げ、その夜、テミストクレスは1匹の蛇がまとわりつて咽喉の方に這い上がってきて、顔に触れるや驚きに変り、驚がテミストクレスを持ち上げて運び去り、伝令使の杖の上に据えろという不思議な夢を見た（第26章）。

その後、テミストクレスはペルシア大王の下に亡命した時に、ドドナで受けた「ゼウスと同名の者のところへ行け」という神託と合わせて、この夢を大王に話して感心させたという（第28章）。驚とゼウスをペルシア大王の比喩だ、と解釈したということなのであろう。

さらに、ペルシアに亡命中に、大王の厚遇を受けたために他のペルシア人に嫉まれ、命まで狙われたことがあった。この時、テミストクレスの枕もとに女神が現われて、命を狙われていることを告げ、テミストクレスは危うい所で暗殺されるのをまぬがれ、その感謝のしるしに女神の神殿を建てて、娘を女神官にしたという（第30章）。

プルタルコスが『テミストクレス伝』で紹介したエピソードをまとめてみると、テミストクレスは神託を自分の政策や身の安全のために利用するような側面と、神々を敬う側面のふたつを併せ持っている人物であり、神々の方はそんなテミストクレスを愛して、生涯においておおむね好意的であった、ということが出来る。プルタルコスがテミストクレスと他の人間の関係みならず、神々との関係にも関心を持ち、ひろくエピソードを収集し、一定の解釈をもって伝記の中に取り込んでいるのは確実である。

5. 結論

ネボスの『テミストクレス伝』は単純明快な構造になっている。すなわち、多種多様な情報を提供してくる史料のなかから、「必要なことをすばやく見抜き、それを弁舌で容易に説明し、策を考え出すのに劣らず、実行に移すのもすばやい」人間であったという自らが理解したテミストクレス像にふさわしいものを選び、それにそって簡潔な記述で伝記がまとめられているのである。テミストクレスの重要と思われる一面に着目して、読者にひとつの明瞭な印象を与えようとする手法であるといってもよい。今日でもコラムや短い評伝などでは見かけることのある、伝記の方法のひとつである。けれども、反面、選択された特徴に合わない側面は、重要なことであっても思い切って省略されてしまうことがある。テミストクレスと金銭の関係がまったく無視されてしまっていることなどは、その典型であろう。

一方、プルタルコスの手法は単純ではない。基本的にはネボスと同じように知略型の人間として描かれている。が、他方では内面に注意が向けられて、名誉欲や愛国心があった人物として描かれてもいるし、強欲な利殖家であったという闇の側面にも注意が払われて、その利殖も政治的、愛国的な目的で使われることがあったことにも目が配られている。また、人間世界のことだけでなく、テミストクレスと神々との関係についてもかなりスペースが割かれていて、テミストクレスが宗教をどう考え、どのように接していたのか、また神々の側ではテミストクレスをどのように処遇していたのか、に興味に向けられている。プルタルコスの手法は、複数の分析方法、複数の関心を同時にもって、異なる観点の話にも気を配りながら記述をすすめていくスタイルである、ということができるであろう。

もし、伝記の手法のなかに人間理解の方法をみることができるとすれば、ネボスは、一見、複雑に見える人間の生涯のなかにも一本の筋道を見ることができると考えて、それをあざやかに提示するのに対して、プルタルコスは人間の複雑さをそう単純に割り切ることができない、複数の分析方法をもって理解しなくてはならない、と考えていたことになる。

-
- 1 プルタルコス『テミストクレス伝』第1章
 - 2 ネ波斯『テミストクレス伝』Ⅱ. 1
 - 3 アテナイオス『食卓の賢人たち』第13巻576c
 - 4 トゥキュディデス『歴史』1. 138、プルタルコス『テミストクレス伝』第31章
 - 5 A.J. Podlecki, *The Life of Themistocles* (1975)
 - 6 R.J. Lenardon, *The Saga of Themistocles* (1978)
 - 7 仲手川良雄『テミストクレス』(中央公論新社 2001年)
 - 8 プルタルコス『テミストクレス伝』第27章、ネ波斯『テミストクレス伝』Ⅱ. 9
 - 9 Cf. Podlecki, *op. cit.*, 195-204.
 - 10 テキストはJ.C. Rolfe, *Cornelius Nepos* (1929)を用いた。
 - 11 第1巻138
 - 12 テキストはB. Perrin, *Plutarch Lives II*(1914)を用いた。
 - 13 プルタルコス『テミストクレス伝』第25章
 - 14 アリストテレス『アテナイ人の国制』第22章
 - 15 ネ波斯は一般的に宗教に対して関心があまり関心がなかったようである。Cf. J.D. Jefferis, "The Concept of Fortuna in Cornelius Nepos", *Classical Philology*38 (1943), 48-50.

(うちばやし けんすけ 西洋古典)